

学級崩壊

—— 学生自身が経験した学級崩壊の原因と結果 ——

Classroom Disruption

—— Causes and consequences of class disruption
that students themselves have experienced ——

太 田 俊 一*	類 家 齊**
Shunichi OHTA	Hitosi RUIKE

I. 研究の概要

- 調査方法
- 法や教育要領では
- 学生自身の経験から
- 道新のコラムより
- 調査を振り返って

II. 調査方法

1 調査の目的

学級の崩壊は、学校の信頼を損ない、学校そのものの崩壊にも繋がるかもしれない重大な問題である。しかし、これまで学校（教師）側、保護者側からこの問題を語ることはあっても、当事者である児童、生徒の言葉で語られることは大変少なかったと思われる。

その理由は多々あるが、第一に、今、崩壊が起こっている学級で、児童、生徒から直接的にしかも客観的に情報を集めることはなかなか困難であるという現実があると思われる。

しかし、大学生にとっては、その現実をすでに終えているということ、さらに、教員養成の大学に進学してきたということは、将来的に自分自身がそのような現実直面するかもしれないという、直接的ではあったが、客観的に見直すことも自分の将来のためには必要という観点もあると考え、あえて学級崩壊というテーマで調査、分析を行った。

2 調査対象者

短期大学部こども学科 1 年前期科目「教職概論」履修学生（百余名）（年度は伏せる）

* 北翔大学短期大学部こども学科 ** 札幌市立山の手小学校

3 アンケートのテーマについて

以下のような3つのテーマから一つを選択させ、自由記述で行うアンケート調査とした。

＜テーマ1＞小中高時代、自分自身で最も関心があったことを書きなさい。

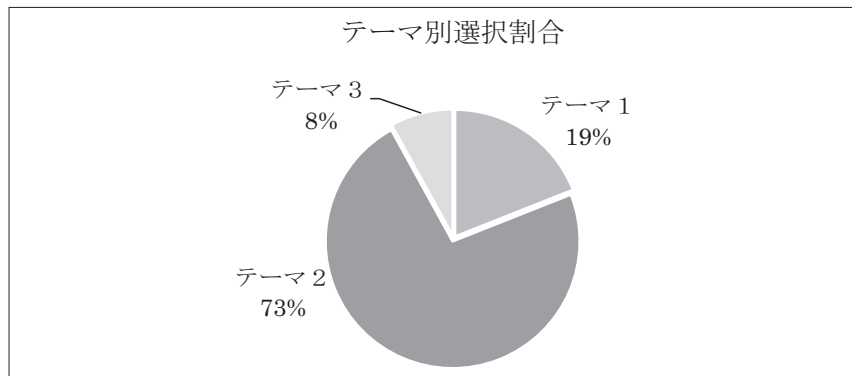
＜テーマ2＞小中高時代、楽しかったこと、辛かったことを一つずつ書きなさい。

＜テーマ3＞小中高時代、実際に学級崩壊を経験し、どう乗り越えたか書きなさい。

実際に知りたいデータは＜テーマ3＞であるが、＜テーマ3＞だけのアンケートとした場合、

- ① 学級崩壊を経験していない学生は書くことができない。
- ② 学級崩壊だけのアンケートでは、経験があっても、書くことに抵抗がある可能性がある。
- ③ ＜テーマ3＞で書けなくても、＜テーマ2＞の「辛かったこと」の所で書くことができる学生がいるかもしれない、等の理由からである。

テーマ1～3で、どのテーマにするかで、学生自身悩んだり考えたりしたと思うが、実際に選択した数値をグラフ化してみると、以下のような結果になった。



4 調査結果からの考察

テーマを選択し、自由記述で回答したというデータであり、あくまでも履修生百余名に限ってということではあるが、小1から高3までの12年間で、少なくとも8%の学級において、児童生徒が学級崩壊を経験しているという現実を、目の前に突きつけられた感がある。

Ⅲ. 法や教育要領では

1 教育基本法 第6条

- 1 法律に定める学校は、公の性質を有するものであって、国，地方公共団体及び法律に定める法人のみが、これを設置することができる。
- 2 前項の学校においては、教育の目標が達成されるよう、ア) 教育を受ける者の心身の発達に応じて、体系的な教育が組織的に行われなければならない。この場合において、イ) 教育を受ける者が、学校生活を営む上で必要な規律を重んずるとともに、ウ) 自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行われなければならない。

＜学級崩壊という現象を，教育基本法の第6条に付した下線箇所で考察する＞

ア）教育を受ける者の心身の発達に応じて，体系的な教育が組織的に行われなければならない。

子供たちにとって，学級が学校での生活や学びを保証する場と捉えると，心身の発達上で問題があったり，体系的な教育が組織的に行われにくい状態にクラスがあることは望ましくない。

イ）教育を受ける者が，学校生活を営む上で必要な規律を重んずる。

子供たちにとって，学級が学校での生活や学びを保証する場と捉えると，必要な規律が存在しにくい状態にクラスがあることは望ましくない。

ウ）自ら進んで学習に取り組む意欲を高める。

子供たちにとって，学級が学校での生活や学びを保証する場と捉えると，自主性を削られたり，意欲が損なわれたりする状態にクラスがあることは望ましくない。

2 小学校学習指導要領総則より

第1 小学校教育の基本と教育課程の役割

1 各学校においては，教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い，児童の人間として調和のとれた育成を目指し，児童の心身の発達の段階や特性及び学校や地域の実態を十分考慮して，適切な教育課程を編成するものとし，これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。

2 学校の教育活動を進めるに当たっては，各学校において，第3の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して，創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で，次の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り，児童に生きる力を育むことを目指すものとする。

(1)基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力等を育むとともに，ア）主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際，児童の発達の段階を考慮して，児童の言語活動など，学習の基盤をつくる活動を充実するとともに，家庭との連携を図りながら，児童の学習習慣が確立するよう配慮すること。

(2)道徳教育や体験活動，多様な表現や鑑賞の活動等を通して，豊かな心や創造性の涵（かん）養を目指した教育の充実に努めること。学校における道徳教育は，特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり，道徳科はもとより，各教科，外国語活動，総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて，児童の発達の段階を考慮して，適切な指導を行うこと。道徳教育は，教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき，イ）自己の生き方を考え，主体的な判断の下に行動し，自立した人間として他者と共によりよく生きるための基

盤となる道徳性を養うことを目標とすること。道徳教育を進めるに当たっては、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、平和で民主的な国家及び社会の形成者として、公共の精神を尊び、社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓（ひら）く主体性のある日本人の育成に資することとなるよう特に留意すること。

(3)学校における体育・健康に関する指導を、児童の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより、健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること。特に、学校における食育の推進並びに体力の向上に関する指導、安全に関する指導及び心身の健康の保持増進に関する指導については、体育科、家庭科及び特別活動の時間はもとより、各教科、道徳科、外国語活動及び総合的な学習の時間などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めること。また、それらの指導を通して、家庭や地域社会との連携を図りながら、日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮すること。

3 2の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動（以下「各教科等」という。ただし、第2の3の(2)のア及びウにおいて、特別活動については学級活動（学校給食に係るものを除く）の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実に努めるものとする。その際、児童の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) ウ）学びに向かう力、人間性等を涵（かん）養すること。

4 各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことに努めるものとする。

<学級崩壊という現象を、小学校学習指導要領総則に付した下線箇所を考察する>

ア）主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の

充実に努める

学習は自分自身のものであるという観点にたった時、学級はその態度を養うための格好の場であり、先生が個々の子どもたちの個性を生かしながら、学級の子どもたち同士が一緒になって、助け合い励ましあう集団を作り上げることこそが、学級や学校に求められる大きな役割と捉えられる。

イ) 自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きる

自分自身が学級の中で生かされ、存在が認められているということ、また自分の考えや興味や関心に基づいて行動ができ、助け合い励ましあう集団の中で切磋琢磨されることで、自分らしく生きることができることこそが、学級や学校に求められる大きな役割と捉えられる。

ウ) 学びに向かう力、人間性等を涵（かん）養する

学級では、自分の考えや興味や関心に基づいて行動ができ、個々の学ぼう学びたいという力が十分に発揮されなくてはならず、そのような環境でこそ、自己肯定感や他者意識などの人らしい成長を無理なく養うことができると捉えられる。

IV. 学生自身の経験から

1 小学校中学年の事例

○事例1（Jさん）

私は小学校3年生の頃「学級の荒れ」を経験した。喧嘩なんて当たり前で、学級自体成り立っていなかったことを覚えている。3年生の頃は1年間通して荒れていた。どう乗り越えたのかと言えば、4年生になる時に、担任の先生だった人がやめていき、他の先生が代わりに担任の先生になった瞬間に学級は良くなったのであるから、もしかすると、いつも問題を起こしていた児童が、その先生のことを気に入らなかったのかもしれない。いつも先生を叩き、大声を出して怒っていた子で、その子を起点として、周りが荒れていたのだと、成長した今、感じている。乗り越えてはいないのだから、方法として言えることではないのかもしれないが、一時期良くなった時のことを言うとするれば、私のクラスには、助手として、担任の先生の他に、もう一人特別な先生が入ってきた。その時は荒れていたクラスも良くなり、一時平穏な日々を送れたことを覚えている。実際、乗り越えたかと言えば、直ったのだからそうかもしれないが、方法的に言うと、乗り越えられたとは言えないと感じる。学級の荒れはなかなか直すのは難しい。先生の根気をも打ち砕いてしまうこともあるのだから、なおさら難しい問題だと思う。しかし、そんな子ども達を支えられるのは教育者だけでもある。乗り越えていくためにも、教育者の力は重要だと思う。

○事例2（Aさん）

私が小学校4年の時に「学級崩壊」というものが起きた。担任は新人の教師であり、ここは記憶があやふやではあるが、採用試験にまだ合格していなかったように覚えている。当時、私たちは自分のいた4年〇組が、他学年にまで「あのクラスは学級崩壊の所でしょ」と言われていたことを、6年生になるまで知らなかったし、そうだとも思っていなかったのだ。どのような感じだったかという、テストではカンニングなんて日常で、テスト用紙はクラスの端から端へ回り、授業中は子どもは喋るし、先生のことは私を含め、なめてかかっていた。他にも途中で帰ろうとする子どもがいたり、挙げきれないので、今回はほんの一部だが、本当に起きたのだ。この問題は正直、乗り越えた、解決したとも言えず、5年生で担任が替わったことにより、収まったと言える。私自身、このことを振り返り、当時の先生には申し訳なかったなと少しは思う。私は小学校の先生になるつもりはないので、こういうことはおそらく経験することはまずないと思うが、人生の勉強になったとは思った。

(1) 現象としてみられること

- ・喧嘩　・先生を叩く　・大声を出す　・怒る　・テストのカンニング
- ・クラスの端から端へテスト用紙が回る
- ・授業中に子どもが喋り、先生のことをなめてかかる
- ・授業中に帰ろうとする子どもがいる
- ・学級自体成り立っていない

(2) 原因として考えられること

- ・問題を起こしていた児童が、その先生のことを気に入らなかった
- ・その子を起点として、周りが荒れていた

(3) 解決に向かったきっかけ

- ・他の先生が代わりに担任の先生になった
- ・助手として、担任の先生の他に、もう一人特別な先生が入ってきた
- ・担任が替わったことにより収まった

(4) 留意すべきこと

小学校中学年の場合は、特定の児童が何らかの事情で、担任の先生のことを好きになれず、反発しだすところから始まり、同調する児童がだんだん増加することから、学級の崩壊が始まる様子がわかる。

したがって、解決策として、①教師とその児童の関係の改善を図る。②「教科担任制」や「複数担任制」を行い、その先生ばかりが常時指導するという状況を避ける。③学年が変わるなどの節目で担任を交代させる。などの方法が考えられる。

2 小学校高学年の事例

○事例3（Kさん）

小学校5，6年の時に，私が所属していた学級は荒れていました。クラスメイトたちは担任教師に対して不満を持ち，中には直接反抗していた児童もいました。普通であれば静まりかえっているはずの朝読書の時間もお構いなしに，皆，教室中を立ち歩き，友人と大声で話したり，騒いだりしていたため，他のクラスの友人に「いつもそっちのクラスだけ読書の時間騒がしいよね」と言われてしまったこともありました。授業中でも先生の話をはほとんど聞かずに周りと話をしたり，隠れてマンガを読んでいた児童もいました。私も一緒になって話をしたり，周りを注意することもできずにいたため，あの頃の自分を思い返すと，今でも恥ずかしいし後悔の気持ちでいっぱいです。私も当時の担任の児童との接し方などに不満を持っていましたが，迷惑を掛けすぎて本当に申し訳ないと思っています。

○事例4（Rさん）

学級崩壊は，一般的に子どもが巻き起こし先生を困らせることが例に挙げられるが，私が経験したのは先生が起こしたことによる学級崩壊である。

私が小学校5年生の時，3，4年の時に共に過ごした仲間に別れを告げ，また新しいクラスにもなり，上級生としてウキウキしていた4月，私がいる5年〇組に女の先生が担任として就いた。「どんな先生なんだろう」「このクラスはどんな人がいるんだろう」そう思いわずか一ヶ月，授業中，少しうるさくしてしまった私たちを叱っていた先生は，突然「学級会をする」と言い始め，その後，帰りまで長引いたという事件が起きた。その後，どんな些細なことでも，朝の会から帰りの会まで学級会。おかげで母親達はモンスターペアレンツと化し，私たちのクラスは，保健の授業など5年生で終わらせることができなく，6年生の前期まで持ち越してしまった。6年生になるとときには，親の圧力で担任が替わり，私たちのクラスだけ特別時間割が設けられ，半年で5年生の勉強を全て終え，残りの半年で6年生の勉強を全て終えるという奇跡が起きた。教室に置いてあったおもちゃなどの全てを，勉強に関係あるものにしてくれたおかげで，まともに小学校を卒業できたことは，6年生の担任団に感謝でいっぱいである。そして自分の記憶に永遠に残ると思う。

○事例5（Yさん）

小学校6年生の時に学級崩壊を目のあたりにした。5年生の時と同じ担任の先生だったのに，一人のリーダー的な存在の生徒が6年生になった途端，担任の先生を言葉で攻撃したり，授業を妨害し始めた。他の生徒もそれを見て同じように担任を攻撃していた。授業にならず，先生が注意すると生徒は物にあたって，先生をおびえさせた。教室は授業を妨害する生徒と，それが怖くて黙っている生徒に二極化していった。私は何もしない方の生徒だった。先生には申し訳なかったが，どうすることもできなかった。その時は自分のことでいっぱいだったからだ。

先生はしだいにやつれていき、学校に來れなくなってしまった。その後、すぐに代わりの先生が來た。その先生との直接的な関わりはほとんどなく、性格もよくわからない先生だったが、生徒に対して真剣に接してくれる先生だった。先生は冷静だったが、「怒らせると怖い」と言われるような所があり、そのせいか、みんな何にも問題を起こさなかった。あれはいったい何だったのか、今でも不思議に思う。

○事例6（Mさん）

小学校6年生の時、学級崩壊を経験した。あるやんちゃな男の子がつけたあだ名でのいじめであった。彼にとっては軽い言動だったのかもしれないが、そのあだ名をつけられた女の子は嫌だということ言えずに苦しんでいた。先生はそのやんちゃな男の子に手を焼いていた。何かあれば物にあたり、時には先生にも手をあげていた。他にも彼はいろんないたずらをしたり、他の人にもひどいあだ名をつけて笑っていた。あだ名を付けられた女の子は我慢できずに泣きながら先生に相談していた。先生は口で注意したがやめる気配はなかった。そこで先生はクラスで話し合おうと提案した。同じ思いをしている人は何人もいたからだ。その時、彼は何度も靴を投げたり、先生にあたっていた。でも、嫌なことをしっかり伝えたことで彼は納得してくれた。今考えると、この方法が本当に正しかったのかどうかかわからないが、その後の学級は平穩に続いて、無事卒業できたので良かったと思う。

○事例7（Yさん）

私が小学校6年生の時、学級が荒れていて学級崩壊のような状況になった時がありました。授業中の立ち歩きや授業と関係のないことなど、みんなは様々なことをやっていました。また、不登校の子も何人かいました。私の友達も一人、不登校になってしまいました。先生は一生懸命に生徒と接していましたが、どうにもならなかったので、他の先生に手伝ってもらって、学級委員を中心にクラスで話し合いが行われました。みんながお互いに意見を言い合いました。私は不登校になってしまった友達の家へ、毎日放課後に行って「明日は来てね」と今日あった出来事を伝え、学校に来る約束をしていました。それでもその子は学校に來ませんでした。でも、卒業式の1週間前から登校してくれるようになりました。とても嬉しかったことを覚えています。その頃までには、他の先生方のフォローと子ども同士の話し合いによって、普通に授業ができるようになっていました。辛い時期だったけど、今では小学校の時の友だちは、大切な仲間ですし、楽しい思い出となっています。どんな学級でも必ず助けてくれる人がいるし、あきらめなければ、学校に來れない子も少しは減るということがわかりました。

(1) 現象としてみられること

- ・担任教師に対して不満を持ち、直接的に反抗する
- ・教室中の立ち歩き
- ・友人と大声で話す
- ・騒ぐ
- ・先生があきらめ始める

- ・授業中、先生の話をはほとんど聞かずに周りと話をする
- ・授業中、隠れてマンガを読むなど、授業と関係ないことを始める
- ・叱っていた先生が、朝の会から帰りの会まで一日中学級会を行う
- ・授業が遅れ、学期末でも終わらない　・担任の先生を言葉で攻撃する
- ・授業を妨害する　・他の生徒が同じように担任を攻撃し始める
- ・授業にならない　・先生が注意すると物にあたり、先生をおびえさせる
- ・教室は授業を妨害する生徒と、それが怖くて黙っている生徒に二極化する
- ・先生がしだいにやつれる　・先生が学校に來れなくなってしまう
- ・靴を先生に投げつける　・不登校になる子がでる
- ・女の子は我慢できずに泣きながら先生に相談する

(2) 原因として考えられること

- ・先生が「学級会をする」と言い、帰りまで長引く
- ・あだ名でのいじめ　・あだ名を付けられた子は、嫌だということを言えずに苦しむ
- ・他の人にもひどいあだ名をつけて広げ始める

(3) 解決に向かったきっかけ

- ・担任が替わり、そのクラスだけ特別時間割が設けられる
- ・教室に置いてあったおもちゃを、全て勉強に関係あるものに替える
- ・代替の先生が生徒に対して真剣に接してくれた
- ・「怒らせると怖い」と言われるような先生で、その後、問題が起こらなくなった
- ・一人ひとりがあだ名は嫌なことをしっかり伝えたことで、その子は納得してやめた
- ・他の先生に手伝ってもらって、学級委員を中心にクラスで話し合いを行う
- ・みんながお互いに意見を言い合う
- ・不登校になってしまった友達の家を訪問して「明日は来てね」と、今日あった出来事を伝え、学校に來る約束をする。
- ・それでも、その子は学校に來なかったが、卒業式の1週間前から登校してくれた
- ・他の先生方のフォローと子ども同士の話し合い

(4) 留意すべきこと

高学年の場合、子ども自身の自我が強くなり、担任との折り合いが悪化する場合もある。この場合、指導の如何によっては、先生自身が学級崩壊の引き金をひいてしまうといった結果を招き、担任が解決のための当事者能力を失ってしまう場合がある。このような場合、学校や学年による組織的、計画的なフォローが必須となる。

また、特定の子どもの行動や態度が、学級の集団の力以上に働いてくると、学級集団そのものが注意することができない状態になってくる。いったんそうなると、私語や集団を乱す行動を始める生徒も増え始め、先生自身があきらめたり、おびえたりするようになる。その結果、教室は授業を妨害する生徒と、それが怖くて黙っている生徒に二極化し、無法状態化すると考

えられる。

先生方のフォローや対応次第では、そうなる前に、児童自身の自助力を高めるような話し合いや、いじめや不登校に対する適切な対応を打つことも可能だと考えられる。そのためにも、素早い情報の把握，組織的な対応，保護者も含めた情報の共有，計画的な指導などが求められる。

3 中学校時代の事例

○事例8（Nさん）

私が中学3年生の時の話ですが、男子と女子の仲がとても悪く，男子の間では女子と話している男子がいて、その男子を仲間はずれにし，女子の間では精神的に追い込まれて過呼吸になってしまう人も出るほどの深刻さでした。私はこの時、副学級長をしており、女子の学級長と共に先生と相談しながら、学級の問題を解決しようと頑張っていました。まずは原因を突き止めるために動きましたが、良い方法が見当たらず、クラスアンケートを実施しても「みんながしているから」といった回答が大半を占めているほどの状況でした。しかし私自身もその一人で、周りの男子に嫌われるのが嫌で、女子と関わりを持たずにいました。しかし、このアンケートをきっかけに周りの男子の協力を得て、女子と少しずつ会話をしていくようにしました。担任の先生も給食の時間は席をグループにしたりして、男女間でのコミュニケーションを取れるようにと工夫していました。このような日々が続き、卒業までには完全にとまではいきませんでしたが、以前よりも男女の仲が良くなりました。現在では定期的にクラス会も開かれ、昔は仲が悪すぎたなど笑い話になっています。私の努力も少しはクラスのためになったのかなと思っています。このようにいじめではなく、クラス全体のトラブルや問題というのは、小学校でも起きると思います。私の体験は、思春期の中学生の頃のことですが、同様なことは小学校高学年でも起こりうることだと思います。もし私が担任の先生だったなら、どうしたんだろうかと考えてみると、生徒の前で話をしたり、個人面談をまず行い、解決策を練っていくと思います。クラスの問題は、まず生徒個々の考えをそれぞれ理解することが、とても大事だと思うからです。

○事例9（Mさん）

私が中学3年の頃、クラスがまとまらなく，とても苦しかったです。体育大会や学校祭のような行事で「同じ目標をもつこと」によって、乗り越え助け合うことで、他の人の気持ちを少しずつ理解できるようになるということを学びました。私のクラスは体育会系でしたが、文化系も苦手ではなく、男女数も半々のクラスでした。しかし、行事に対してやる気は熱いけど、うまくまとまらないことがすごく多かったクラスでした。学校祭の時の準備期間はすごくいろいろなことがありました。中でも合唱と演劇が一番大変でした。中学3年という難しい時期でもあり、「合唱なんてバカバカしい」という考え方や「演劇なんて恥ずかしいからやりたくない

い」など、クラスの約半数が学校祭に対して後ろ向きでした。チーフやリーダーがそれぞれ頑張っているのに、みんながそんな状態なのが私は嫌でした。私は、どうしたらクラスみんながやる気になれるのだろうかと考え、今、頑張っている人たちが目指しているものは何なのか、それが他の人たちに伝わっているのだろうか？これが根本的な部分で、原因なのではないかと思い、作業をいったんやめ、みんなで話し合うことにしました。話し合ってもそう簡単には解決はしませんでしたが、少しずつ一人ひとりの意識も変わり、頑張っている人の頑張りを認め始め、みんなだんだんとやる気になり、とうとう全員が同じ目標をもってやり遂げることができました。誰かの気持ちを動かすのは、誰かの一生懸命な姿を見て、しっかりと現実に向き合い、自分の意思を伝え、相手の気持ちを受け取ることなのだと思います。全員が同じ目標を持ち、手に取った時の喜びは、一人だけの喜びの何倍も何倍も大きかったです。

(1) 現象としてみられること

- ・男子と女子の仲がとても悪い ・仲間はずれ ・精神的に追い込まれる
- ・クラスアンケートでも「みんながしているから」という回答が大半を占める状況
- ・クラスがまとまらなく後ろ向き

(2) 原因として考えられること

- ・中学3年という難しい時期

(3) 解決に向かったきっかけ

- ・学級長と副学級長と共に、先生と相談しながら、学級の問題を解決しようとする
- ・アンケートがきっかけで、協力的な男子が出てきて、男女間が少しずつ会話を始める
- ・担任の先生も給食の時間は席をグループにしたり、男女間でのコミュニケーションを取るように工夫をする
- ・話し合ってもそう簡単には解決しなかったが、とにかくみんなで話し合う
- ・少しずつ一人ひとりの意識が変わり、頑張っている人の頑張りを認め始めた
- ・少しずつだがやる気になり、最後は全員が同じ目標をもってやり遂げた

(4) 留意すべきこと

中学生3年生ともなると、私が担任の先生だったなら、どうしただろうかと考えてみたり、誰かの一生懸命な姿を見て、しっかりと現実に向き合い、自分の意思を伝えるといったような他者意識が大きく成長し始めていることが分かる。生徒自身が持つ「気持ちを動かすのは相手の気持ちになること」といった意識を、できるだけ多くの生徒が持つことが、学級崩壊を食い止める大きな力なのかもしれない。

全員が同じ目標を持ち、手に取った時の喜びは、一人だけの喜びの何倍も大きかったというような成功体験や成就感を、クラスで積み上げていくことが、この時期の生徒たちにとって、学級崩壊を防ぐ最大の防波堤となると考えられる。

教師自身にとっても、生徒の前で真剣に話をしたり、個人面談を行ったり、生徒と一緒にって解決策を練っていくことが大切であり、生徒個々の考えを理解することが、解決のための第一歩と考えられる。

V. 道新（2018.9.17）のコラムより

【タイトル：新学期、落ち着かないクラス】

<Q>新学期になって、クラスが落ち着かないです。授業中なのに大きな声でおしゃべりをしたり、授業に関係のないことをしている人がいて、先生がそれを注意するたびに授業が中断します。私は授業が好きなのですが、先生以外に誰も注意する人がいないので、「イヤだな」と思っても何もできません。（中2女子）

<A>ふざけている人がいて、そのせいで授業が何度も中断してしまうと、まじめにやっている自分がばからしく思えてきますね。実は教育についての研究結果からは、「落ち着かないクラス」の生徒の大半は、そんなクラスの状況を「イヤだな」と思っていることが明らかになっています。と同時にそれらの生徒の大半は、自分は「イヤだな」と思っているても「自分以外の多くの人は、そうは思っていないだろう」と思っていることも明らかになっています。つまり「本当はみんなイヤだと思っているのに、他のみんなはイヤだと思っていないと思っている」だから誰も何も言わないという状況が「落ち着かないクラス」では起きているのです。これが分かれば、いくつか取り得る手が考えられます。一つは、ちょっと勇気を出し「今のクラスって変じゃない？」という疑問を口に出すことです。もう一つは、先生にそれを言うことです。実は先生だって「何とかしよう」と思いつつも、生徒たちが何も言わないので「生徒たちはクラスの状況をそれほどイヤだと思っていない」と思っているのかもしれませんが。あなたの行動一つが、クラスを変えるかもしれません。現代は何かと空気を読み合うことが求められます。しかし、研究から分かっていることは、気持ちの良い仲間関係や集団を維持するためには、ちょっとずつでも良いから、思っていることをきちんと口に出すことが大切だということです。

加藤弘道氏（北大大学院教育学研究院 准教授）

VI. 調査を振り返って

本調査のきっかけは、今、学級崩壊で悩んでいる学級担任や学校関係者がかなり多いこと、それにも関わらず、学校（教師）側、保護者側からこの問題を語ることはあっても、当事者である児童、生徒の言葉で語られることが大変少なく、子ども視点での考察が必要であろうと考えたからである。また、教員養成の大学に進学してきた学生ということもあり、将来的に自分自身がそのような現実直面するかもしれず、自分の将来のためにも学級崩壊というテーマを客観的に見て、対策を考えておくことも必要であると考えたからである。

小学校中学年では、一部の児童が担任に反発し、その子を起点として学級崩壊が起こりやす

いことが分かったが、小学校高学年ではそれに加えて、子どもの状況に即していない担任自身の指導によって引き起こされる場合があることも分かった。中学生では「中学3年という難しい時期」としか、当事者である子どもたち自身でもわからないことでもあり、さらなる研究が必要と考えている。しかし、年代が上がるにしたがって、大人たちの力を借りながら、自分たちで解決していく力が向上することが分かったことは、大きな成果と考えている。

VIII. 参 考 文 献

- ・文部科学省編 幼稚園教育要領（2018年版）
- ・文部科学省編 小学校学習指導要領（2020年版）
- ・北海道新聞（2018.9.17） 加藤弘道氏（北大大学院教育学研究院 准教授）